

識字教育の現状と問題点

—— ネパール王国の場合 ——

久野 登久子

(幼少児国際教育交流協会・学校法人高千穂学園高千穂幼稚園)

I. 識字教育の現況

この地球には、貧困や戦争などさまざまな理由で、自分の国の言葉を読んだり書いたりできない子どもや大人が大勢いる。物を買う時、お金をいくら払うかわからない……、薬があっても分量や飲み方もわからない……。1990年にはこうした人々が世界の中で10億にものぼり、読み書きができないことによっておこる不便、不安、不正や屈辱、搾取……等々を取り除くために、国連総会では、この年を「国連識字年」と制定し、ユネスコを中心にそれらの問題解決のための活動を開始した。

世界の15歳以上の推定人口
35億8,000万人のうち、読み書きできない人々（非識字者）
の数は9億4,800万人で、4人に1人の割合である。そのうちの71%はアジアに、そして非識字者の割合の高い国が最も多いのはアフリカである。

(1990年の統計)

近年、アジアの識字問題の在り方が地域によって大きく

異なってきた。インドやバングラディシュなど、インド亜大陸を中心とする国々では、全く読み書きのできない完全な非識字者問題が最も深刻であるのに対し、アセアン諸国（東南アジア）を中心とする国々では識字の後の継続教育が大きな問題となってきた。この継続教育はアジアにとって全く新しい概念であり、このように重要視されてきた原因は、学校を終えたり識字教育を受けたりした人々がその後どのように学び続け、どのように社会を創造して行けばよいか、つまりアセアン諸国では生涯を通じて学ぶことが、人生や社会に対する「投資」であることを認識したのである。

非識字は、10億人の非識字者だけの問題ではなく、世界中の人々の問題である。そこで1990年8月、ユネスコ、ユニセフ、国連開発計画、世界銀行の4者がタイのジョムティエンで「万人のための教育」世界会議を開き、今世紀末までに到達すべき目標を次のように定めた。

- 2000年までに全世界が初等教育を完全実施するか、それに近づける。
- 学習成績を向上させる。
- 2000年までに成人の非識字率を1990年の半分に減らす。

す。とくに現在の男女間の非識字率の格差を大幅に縮めるよう、女性の識字に十分な力点を置く。

- 青年や成人が必要とする基礎教育や、不可欠な能力の訓練を拡大する。
- 個人や家族が生活の向上や開発をすすめるために必要な知識や技能、価値をより多く、獲得できるようにする。

II. ネパール王国の概要

中国とインドの間に横たわるネパール王国は、紀元前キラータ王朝に始まり、1951年に開国した古くて新しい国として世界の人々に注目されてきた。面積14万平方キロ(北海道約1.8倍)の小国ではあるが、有史以来どこの属国ともならず、独立を維持してきた王国である。人口約1,900万人、主なる民族だけでも30あり、それぞれの言語を有している。(国語はネパール語である。)

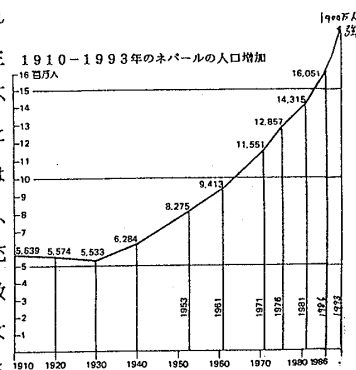
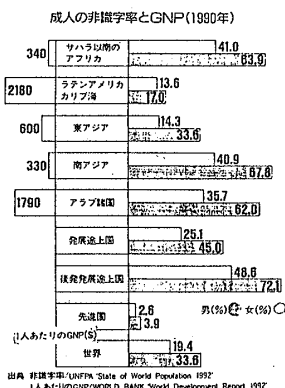
人口の約90%が農業従事者であり、経済面で厳しい開発途上国としての諸問題を抱えている世界で最も貧しい国(LLDC)のひとつである。宗教はヒンズー教徒が大部分で、カースト制がある。宗教とも密接な関係があるためにカースト制がなくなって行くのは難しい状況にある。

III. ネパールの教育現状

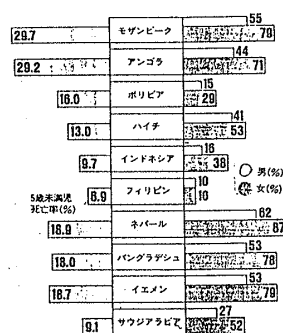
教育制度では、1年生から10年生まであり、急激に人口増加した現在では、入学時、子ども全体の60～70%が在籍していると言われ

る。授業料は、5年生までの小学校では不要であるが、中学に当たる6年生からは必要となる。それが、教師の給料などに充てられる。女子の数は男子の約1/3で、女性が教育から阻害されている現状を示している。小学校1年から毎年学年末に試験があり、その結果で次の学年への及第が決定する。留年すると学校に来る子どもは減少し、結局退学していく。これが非識字者増加の要因となっている。

学校に行かれない子どもと同時に、大人の非識字問題に関しても、男女間の格差、都市と農村の格差、またカーストによる格差があるのが実情である。しかし、都市



成人の非識字率と乳幼児死亡率(1990年)



出典: 非識字率: UNFPA, State of World Population, 1992
乳幼児死亡率: 国連人口基金, 世界人口展望 1992 のデータより作成

習会を開催したりしているが、そこに参加できる人々は、それを必要とする人口から見ると、ごく少数であり、なかなか困難な現状である。

昨年1993年、秋の第27回ユネスコ総会で、わが国の主席代表として赤松良子文部大臣も、世界の非識字者の2/3を占める女性への識字教育の重要性を強調された。

IV. 識字教育の問題点と今後の課題

先に述べた識字状況の偏り・格差や、中途退学・留年の現状、また教育施設・教材・教師の不足、さらに経済的理由や子どもが一家の労働力であるなどのほか、母語の違いによる弊害など問題が山積している。これらは、第三世界で共通の問題とも言えようが、世界中すべての子どもに“学ぶ権利”が与えられていることを忘れてはならない。先に述べたような非識字によっておこる生きる上での多様な問題は、貧困や差別など大きな問題と関わり、社会的弱者を生む。従って識字教育は、それと併せて様々な社会的な取り組みが重要なのである。識字といっても、単に文字を学ぶというより、読み書きが生活に不可欠であることを、体験を通じて学べるような工夫が必要となる。グループで学び、学習に対して関心をもつことにより、自分と社会とのつながりに目が向けられ、個人的な行動が横のつながりとなり、現状をより良く変えて行く意欲に発展させることが大切である。国家の教育に対する姿勢と教師の質の向上への自助努力が必要不可欠となり、公共機関との連携も心掛けながら、政府・民間・個人それぞれの活動レベルを結び付けて行くことが必要であろう。

本協会は1977年来、ネパールとの教育交流が続けているが、1990年の国際識字年を機に、現地よりの要請もあり識字問題に取り組んできた。従来、幼少児教育を中心としてきたが、現在は成人教育と両輪で行う方向に進んでいる。教育はその国の発展の原点であり、社会環境や地域開発との関わりを考えずには果たし得ない。また、開発や活動の中心はあくまでもその国の人々であるという立場で自助努力への協力を続けている。

部で識字問題がないわけではない。現に、首都カトマンドゥ近郊でも識字学級が開かれ、各所に文字を必要としている人々が存在しているのである。政府は、識字教育のための教科書を作ったり、識字学級の指導者のための講習会を開催したりしているが、そこに参加できる人々は、それを必要とする人口から見ると、ごく少数であり、なかなか困難な現状である。

1993年には、上記の学校教育不可能な子どもや成人のための教材及び巡回識字教育用車両、並びに図書室・事務室を開設し得た。

巡回識字教育のオープンセレモニーと活動開始のため12月18日から25日まで、理事長以下本協会の教育ボランティア8名が現地に出張した。

◇12月20日 ネパール側の要請により、カトマンドゥ市ラリット学校において衆議院議長、文部次官を始め、カウンターパートの巡回識字教育委員会(委員 前副大臣) 地元教育者等200名余の出席を得て、盛大な巡回識字教育オープンセレモニーが開催され、車両、図書、教材教具等を政府を通して委員会に贈呈した。

◇その模様をネパールテレビが取材し、可能な範囲で放映された。(ビデオテープあり)

◇12月21日 ゴダワリ地区を中心として識字教育に参加。地区の教育者と意見交換を行い、地区の子どもたちに識字教育を行った。

◇12月22日 SOSネパールスクールを訪れ(観望は同子連の記録)、先生や生徒と交流した。

◇12月23日 日本大使館を訪れ、大使及び参事官に協会の識字教育活動について説明し、協力を依頼した。

◇12月24日 ネパールテレビ局を訪れ、総務局長以下と懇談し、識字教育への協力を依頼した。

◇識字教育用図書室、事務室で3回にわたって委員会を開き、識字教育の展開について協議し、年度末までの必要経費を手渡した。

今 後 の 課 題

◇ネパールの識字教育は、人口の爆発的增加、極端な貧困、一人当たり所得年180ドル、国民の90%を越える農業の零細性と低生産性、零細な商工業、底賃金の日雇い労働、30以上の部族とカースト制による階級と差別といった社会経済構造と切り離して進めることはできない。

◇非識字がこのような貧困と差別を助長しており、これを断ち切るために巡回識字教育活動に寄せるネパール政府、報道機関、教育関係者の熱意と、集まった部落の男女、子どもたちの関心と熱い眼差しに強い印象を受けた。

◇この期待に応えて巡回識字教育活動の内容を更に充実させるため、3月～4月の2ヵ月程度、会から教育専門家を派遣して、識字教育のやり方について指導すると同時に、識字教育の教材・教具を更に追加する必要性を痛感した。

今後さまざまな問題解決に向かい研究を重ねつつ長期的な協力を続けて行かねば……と計画立案している。